《文壇花絮》

宗璞と可愛いい弟

――文学と家族・断想――

釜屋　修

宗璞。1928年北京生まれ。本名馮鍾璞。哲学者馮友蘭の次女、父方のおばに女流作家馮沅君。名門の出である。抗日戦中、父（西南連合大学文学院長）に従い一家で昆明郊外龍頭村へ。連大附中時代早くも文才をあらわす。抗日勝利後、南開大、清華大に学び両大学を通して李広田（『引力』の作者）の指導を受けた。処女作「ＡＫＣ」（未見）、芦溝橋近郊の貧しい家の解放前の悲惨を描いた『訴』を発表した。卒業後、宗教事務局、文連、文芸報編集部と仕事にも十二分に恵まれた。'57年「紅豆」は自己の体験をもとにした解放前後の北京の大学生の恋愛と革命をテーマにしたものであるが（“紅豆”は王維「相思子詩」などにみられる相思のシンボルとなる植物）彼女の出世作となった。'64年、創作のための休暇は、昆明時代の結核からくる病弱のため下放せず、北京大学でフランス語を学ぶ。文革中は、もちろん“ブルジョア反動権威・馮友蘭の娘”（註）として激しい批判にさらされ、原稿もすべて焼いた。'68年結婚。文革後創作を再開、短篇「弦上的夢」――けっして成功作とは考えられないが――中篇『三生石』が話題作となった。

その彼女の短篇の一部に、いかにも愛くるしい、仲睦じい姉弟の姿がある。

> 台所を通りぬけると、中庭の通路のつきあたりの窓の下の小机に向かって弟が絵をかいていた。そこは弟の小天下、壁に棚をかけいろんな模型飛行機がおいてあった。ふりむいて姉だとわかると、立ちあがってうれしそうに「ねえちゃん、どうして裏口から入ってきたの」と言った。‥‥（中略）‥‥母さんまだ帰ってないよ。今日は昼から会議だって」といいながらガタガタと引出をあけ、古い封筒を出すと題翠の手に押しつけた。「あげるよ、早く見な。これ、友だちと切手屋

さんの前に何時間も立ってとりかえっこしてきたヤツなんだ、ものすごくキレイだから」

十歳くらいの姉がボールにいれたごはんをささげ持ち、六歳くらいの弟はルル〔犬の名〕に近づくとさっと姉のうしろにかくれ、姉の服をギュッと握りしめた。「ルル、ごはんよ、たべな。お肉がたっぷり入っているよ」姉は手に持ったごはんをルルの傍においた。

上は「後門」（'68）、「春春」（'82）にみられる姉弟像である。前者は50～60年代初期の少女の進学問題の悩みを描き、後者は抗日戦勝利までの、昆明近郊に“疎開”した知識人一家とユダヤ老人の遺した愛犬ルルとの愛情物語である。作中の姉は宗璞その人、弟は実弟の故人、馮鐘越（科学者・航空工学）をモデルとしているとみてかまわないであろう。「私は弟より三つ年上。記憶が比較的まとまって残っている頃から、生活の中にはいつも弟がいた。まるまるふとった可愛いい弟で、私のあとにくっついていた」という。この模型飛行機好きの少年が50歳で老父や姉に先立って「千古の哲人のおしはかりえなかったところ、さまざまな宗教によって描きだされようとしていたところ、誰もが行くにちがいないところ、しかも帰ってくることのないところ」へ旅立ったのは1982年10月28日。姉の手許に、海外視察用に用意したもののついに使われることのなかった名刺「飛行機強度研究所・技術所長・馮鐘越」を残した。馮家は1974年の元君の死以来不幸が続いたというが、この弟の死が「最も常規に反した」ものだった。老父友鄭は挽聯をしたためた。「是好党員，是好幹部，壮志未酬，洒泪豈只為家痛；能爛科技，能爛芸文，全才罕遇，招魂也難再帰来！」白皙長身、詩詞に爛（熟達）、書道・てん刻にしたしみ、「全才罕遇」も誇張でなかったという。多くの人に愛され、遅すぎた発見の腫ようの副出手術の時も満員バス並の見舞客があった。昆明での疎開、清華大時代（航空学科）とたえず共にすごしたあと、西南、東北、成都、陝西と仕事のためにとび廻った弟は北京の馮家からは離れていたが、何かと事あるごとに「弟が帰ってから」「弟に聞いてみて」と、一家の期待の星であった。

宗璞の作品の一つの系列には、一種清澄な雰囲気がある。青春を背負った若者たちは健康でやさしい。それは彼女の育ちや血筋の良さそのままの

反映でもある。子ども、学生、バレリーナ、音楽青年、南画家、ホログラフィ技術者などを描いて、いずれも迷いや挫折から立直る過程や心理を描くことを基調とした宗璞の世界が、この基調と明暗もくっきりと異ったもう一つの顔をみせるのは、文革をある怨念でとらえた作品類である。「我是誰？」「蝸居」など。前者は迫害の中で自殺した科学者を夫に持った女性の精神錯乱を意識流風の手法で追求し、後者は文革を暗夜、地底、中世ヨーロッパの暗黒裁判に擬して暗示的である。時代や舞台は具体的ではなく、迫害への告発もストレートではない。それだけに、余計、作者のこの問題についての呪詛が深く、ヒューマンな立場からこれを総括し抗議しようとする姿勢が感じとれる。馮友蘭を父とした彼女の体験をもとにした抗議の姿勢であることもまちがいないところである。抗日戦中から解放、建設、文革とその否定へと激動と混乱に直面した知識人一家の一員として姉と弟は運命共同体的緊密さで結ばれてきた。弟の死がこんなにも痛切の思いを彼女におこさせるのも、単なる骨肉の情以上の一家の連帯感があるからであろう。そして歴史の苦哀をのりこえ得た時点での弟の死を「洒泪豈只為家痛」と老父がよむのは、名門の誇りである。

それらの家族の思いは、文革の凶暴な誤ちの具体状況に即して考えれば、十二分に納得のいくことである。と同時に、こうした一種の名門家族主義とでもいうべきものの持つ閉鎖的、排他的保守性、門閥主義の危険をも想起せざるを得ない。とりわけ、文学研究の領域にこうした傾向が持ちこまれることは危険である。一人の作家の研究を、その遺族たちの“家学”としてしまうこと、ある地域や流派の至宝として閉ざしてしまう文学封建主義は、文学研究の非近代性として排除されるべきであろう。

宗璞の弟への痛切な連帯感は美しい。それをそれ自体として十二分に評価した上で、そうした一つの歴史総括につながる思考を、より民衆全体とのかかわりで、開放してほしいと願う。

（註）文革期儒法闘争における馮友蘭のイデオローグ的役割についての評価はここではふれないことにした。

1985.11.20.　　(O.kawaya)

〔消息〕4・作協二則

（1）『中国婦女報』によれば、中国作家協会全国会員のうち女流作家は1985年末現在で235人になり、20数人が理事に選ばれているとのこと。専業女流作家は110余名とされており、比率は約47%。因みに、1979年の作協機能回復時の女流作家全国会員は数十名とされる（『人民日報』1986年1月1日の記事より）。

（2）1985年11月5日に開かれた作協第四期第三回主席団会議は、七専門委員会の活動再開、担当責任者を決定した。（『文芸報』1985年11月16日の記事より）。

委員会	主任	副主任
1．創作	丁玲	田漢
2．理論批評	馮牧	謝永旺
3．作家権益保障及び生活福利	陳荒煤	張俊・張僖
4．中外文学交流	葉君健	朱子奇・邓友梅
5．軍事文学	劉白羽	葛洛
6．少数民族文学	鉄衣甫江（ウイグル）	瑪拉沁夫（モンゴル） 烏熱尔図（エヴェンキ）
7．文学期刊工作	韦君宜	李子雲・範程

講読費期限切れのお知らせ

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

貴殿の講読費は第 3 号で期限切れとなります。つきましては、

4 ～ 6 号分 700 円、御納入お願い申し上げます。

中国当代文学研究会